

<研究論文>

憎 悪 と 恐 怖 (2)

——「スターリン主義」考——

小 沼 堅 司

IV 大粛清の前史——リューティン事件からキーロフ暗殺まで——

スターリン体制を考察するときわれわれがつねに心にとどめておかなければならない重要な事実は、世紀初頭の創立以来1920年代の末までのレーニンの党の歴史には分派闘争と反対運動が存在し、しばしば党政策綱領をめぐる公然たる論争がたたかわされたということである。

レーニンの死後党内闘争は激化した。20年代半ば、トロツキー派あるいは1926年にスターリンの以前の同盟者ジノヴィエフとカーメネフが合流した「左翼反対派」は、急速な工業化

目 次

I 黙示録的断章——序に代えて——	
II 全体性の弁証法の恐怖	
III 国家儀礼の成立とコミユニタスの強奪 (以上前号)	
IV 大粛清の前史——リューティン事件からキーロフ暗殺まで——	1
V 補論・ギンズブルグ『明るい夜暗い昼』をめぐる (以下来年度未定) ——恐怖と狂気のシンフォニー——	
VI 大粛清の波とモスクワ裁判	
VII 現代における検閲と精神医学の政治的利用	
編集後記	28

の綱領と「永続革命」論をもって「一国社会主義」論とたたかった。後者はスターリンと同一視されるようになったが、もともとその起源はブハーリン、ルイコフ（首相）、トムスキー（労働組合指導者）らを指導者とする「右翼共産主義」グループの理論に発するものであった。これらの人々にとって「一国社会主義」は、ロシア農民の強制的な集団化を伴わない漸進的な工業化、独裁の苛酷な側面の緩和、西欧諸国との外交的紐帯と経済信用確保のためにヨーロッパへの革命の輸出政策を強調しないことを意味していた。この「一国社会主義」のスローガンを引き継ぎ「左翼反対派」との党内闘争に勝利を占めたスターリンは、その後右翼指導者に「右翼反対派」という烙印を押し、異なった解釈を与えた。スターリンにとって「一国社会主義」は、独裁の強化、国民経済を全面戦争の準備へふりむけることを意味した。これをかれば、重工業と軍需生産を中核とする危険な工業化と、強制的集団化による農民労働の搾取とによって実現しようとした。スターリンの政策は、第一次5ヶ年計画(1928-33年)において具体化された。

右翼指導者たちは、このスターリン路線に対して原理的に反対した。著名な理論家にして「右翼反対派」の精神的支柱であったブハーリンは、この戦いの前面に立った。その過程で彼は、スターリンの旧左翼反対派ジノヴィエフとカーメネフの支持を獲ち得ようとした。1928年7月11日、秘かにカーメネフと会い、スターリン路線は革命にとって致命的であることを訴えた。スターリンは、強制的工業化のために農民からできうる限り多くを「しばり取る」というプログラムによって、ソヴェト国民を餓饉、破滅、警察体制に導こうとしている、そしてこの路線を、社会主義が成長すればするほど階級闘争は激化するという「白痴的」な議論によってイデオロギー的に正当化しようとしている、とブハーリンは強調した。スターリンをジングスカンになぞらえつつ、中央委員会で彼を解任する条件が整いつつある、しかし未だ完全ではないと訴えた。権力維持にのみ関心をもち「復讐の理論」に習熟したスターリンは、反対派を締め殺す決意を固めた。このブハーリン-カーメネフ会談の内容がちにトロツキー派によって海外で公表されたことは、ブハーリンと右翼反対派に致命的な打撃を与えた。

1929年初めなお『プラウダ』の主筆の地位に留まっていたブハーリンは、レーニン没後5周年にあたる1月21日の『プラウダ』に「レーニンの政治的遺言」と題する論説を発表して、スターリン路線に対する最後の公然たる闘いをおこなった。(LXXIX, Tucker, 58 ; cf XLI, ニコラエフスキー「一古参ボルシェヴィキの手紙」)かれは、注意深くしかし確信をもって、ロシアにおける社会主義体制の建設は「平和的組織化と文化的仕事」の長い過程を通じて達成されねばならない、というのがレーニンの最終的な立場であると論じた。ブハーリンの議論に

よれば、レーニンの政治的遺言は、社会主義はソヴェト社会における階級闘争の激化なしで建設されうるしされねばならないということであった。次の数ヶ月間、政治局ではこれらの問題をめぐって激しい論争が闘わされた。右派指導部はスターリンのワンマン的決定を攻撃し、スターリンの集団化計画は「農民の軍事的一封建的搾取」をおこないつつあると批判した。しかし右翼反対派は敗北した。1929年4月ブハーリンは、『プラウダ』主筆とコミンテルン執行委員会議長の地位を解任され、同11月政治局からも追放された。ルイコフとトムスキーもそれぞれ、首相と労働組合指導者の地位から追われた。11月この3人の右派指導者は、自分たちの「逸脱」を公然と認めた。

公然たる反対は不可能であったが、ブハーリンはなお間接的な方法、あるいはツアーの検閲体制を経験していた古い革命家の間では「イソップ的言語」として知られていた方法によってスターリン批判を続けた。1930年3月7日、カトリック教皇制とピウス法皇が出版したばかりの共産主義批判とに対する論戦という形をとった『プラウダ』論説でブハーリンは、スターリンとその政治局である「教皇たち」や「イエズス会修道士」たる内務人民委員部（NKVD）による「異端」（反対派の見解）弾圧を間接的に批判しようとした。かれは、特別の政治的意味をこめて教会史から次のように引用した。「もしかれら（教皇たち）がその魂を殺すならば、どうしてかれらはキリストの後継者と自称する権利をもつのか。キリストはかってペテロに次のように語った——私の羊たちを養え。しかし教皇たちは一体何をするのか。かれらは、キリスト教徒たちから全てを略奪してかれらを飢えさせないであろうか。かれらは絶えず羊の毛を刈り続け、その間に肉まで切り刻まないであろうか。」（LXXIX, Tucker, 58-59）この「イソップ言語」による論説は、当時推進されていた破滅的な強制的集団化によって農民から略奪し国民を飢餓においやっていたスターリンは、レーニンの政治的遺言に具体化されているポリシュヴィズムの遺産に反している、ということの意味していた。当時党内にこのような見解を共有する人々が少なからずいたことは、以前のブハーリン支持者がスターリンの政策を厳しく批判しかれの解任を要求して書いた文書（いわゆる「リューティン文書」）の秘密の回覧によって示されている。しかしリューティン裁判とそれに続く一連の弾圧・粛清によって反対派は息の根を止められ、1934年の第17回党大会（「勝利者の大会」とよばれた）までに、ブハーリン、ルイコフ、ジノヴィエフ、カーメネフ、ピャタコフ、ラディックのような著名な反対派は、党の全般的路線を承認し、スターリンの指導に賛辞を捧げるほどに後退してしまった。

集団的な大量処刑とシベリアの強制収容所への大量追放（飢えと病気と拷問による死への追放）、それに都市への食糧調達と穀物輸出の急増の中での500万人以上の大規模な飢餓死を伴

う農業の強制的集団化と、労働規律=抑圧法令を伴う超工業化の嵐のなかで、スターリンは、大粛清時代の新型の恐怖政治に向かういくつかのシナリオを準備し始めた。暴力による急激な集団化は農村に悲劇をもたらしたが、ブハーリン、リュコフ、トムスキー等の右派指導者は、このスターリンの政策上の敗北と全国の党支部のなかで自然発生的に芽生えた全体としての人民の潜在的な支持にもかかわらず、なんら有効な政治指導をおこなわなかった。右派指導者もトロツキー派も、スターリン路線は破滅的なものであり、いずれ人民はその致命的な結果を認識するにちがいないと判断して、若手の反対派の動きを抑えた。反対派の指導者にとっても、人民とくに農民の支持を得て「党」に反対することは考えられないことであった。このような彼らの組織的な闘いを伴わない変化への期待は、スターリンの政治上の勝利を可能にした要因の一つであった。1930年7月トムスキーが、同年12月リュコフが政治局から追放された。ブハーリンは、既に1929年4月プラウダの主筆とコミンテルンの議長から解任され、同11月には政治局から更迭されていたから、これ以後政治局は純粋にスターリン主義になった。スターリンは、農村における「第二の内戦」の過程で党員から軍隊的忠誠と絶対の団結を要求することによって権威主義的、弾圧的な体制を更に強固にすることができた。党と国家は同一視され、強大な国家の執行=弾圧装置のネットワークが社会生活のすみずみにまではりめぐらされ、党は一連の組織を通じて国民生活のあらゆる領域を統制した。政治警察から労働収容所を含めてさまざまな弾圧装置の増殖と度重なる党内粛静(とくに1929年4月の第16回党協議会と1933年1月の全連邦共産党中央委員会・中央統制委員会合同総会)の嵐のなかで強化されていった党崇拜は、あらゆる批判を封ずる政治的、論理的なテコとなるとともに、1929年12月のスターリン50歳の誕生日に堰を切ったように昂揚した奇怪なスターリン崇拜の現象を生み出す背景となった。あらゆるソヴェトの出版物は、「党の最も重要な理論家」、「レーニンの最良の弟子」、「世界共産主義の首領」に対する感謝と賛美を合唱した。国の全ての党書記は、この唯一無二の偉大なる指導者の徳をほめたたえ、尊敬の印を捧げた。ソ連邦の全ての街の壁という壁や、公共の建物の内にも外にも、いたるところで彼の肖像が掲げられた。彼の立像や胸像が、ソ連のどの都市の広場にも、公共建物のホールにも、あらゆる商店の窓や粗末な理髪店の店先にさえあふれていた。パミール山脈の最高峰はスターリン山と改称された。新聞論説と公開演説は、スターリンの論文からの引用と彼の偉大さへの言及で溢れた。「スターリンこそ今日のレーニン」というスローガンが全国に響き渡った。のちに「人類の教師」、「ソ連邦の全知の神」にまでもち上げられることになるスターリン神話の創成は、その理論的、心理的前提として党=国家崇拜をもっていた。(XL, ドイツチャー, 187; LXV, アゴスティ, 91; cf. XXXVII, メドヴェーデフ [上] [下]) 既にスターリンは、10月

革命10周年記念(1927年11月)と第15回党大会(同12月)において一枚岩的な党の観念、つまり全黨員が一致した行動をとるだけでなく考え方も同じでなければならないとする観念を提起していた。この恐ろしい観念によって彼は、敵対者が彼の命ずる規律に従うだけでなく、敵対者自身が見解を否認・撤回し、「党に対する犯罪へ転化した過ち」を自己告発することを要求した。この教会的儀式(懺悔)を模したような自己告発と自説撤回は、党内闘争における強力な武器となっただけでなく、のちに詳しく検討するように30年代の旧反対派とスターリン陣営の穏健派の絶滅の総仕上げの儀式ともいべきモスクワ裁判演出の不可欠の要素(自白)となり、スターリンの全能性と無謬性の神話創成にあたってその科学的=宗教的な前提となった。われわれはこれから、ナチスのユダ人虐殺や反対派圧殺などと並ぶ現代史の最大の悲劇ともいべきスターリンの大粛清へ至る過程を詳しくたどることにしよう。

大粛清時代の恐怖政治の完成には、その不可欠の前史が多数存在している。それらは、党内闘争の論理、粛清諸装置の増殖メカニズム、スターリン型恐怖政治の新しい要素である「見世物裁判」創作の舞台裏、党内外における全般的な相互密告システムの恐ろしさ、そして何よりも党独裁とスターリン個人独裁体制における対人民闘争の実態と収容所体制の構築の論理など、苛酷な政治のおぞましさをまざまざと物語っている。そしてまた、おぞましい政治がかなでる狂気と恐怖のシンフォニーと闘いそれを防ぐためには、制度と制度を運転する精神がいかに大切であるかを我々に教えている。例えば——この前史に限ってさえ——、旧反対派と党指導部との融和路線の意味、中央委員会と政治局・書記局・組織局の党規約上の公式の権限関係の逆転が果たしたスターリン権力再生産過程における機能、中央統制委員会の政治局への隷属による粛清の歯止めの除去、政治局のコントロールからの粛清機関(内務人民委員部、中央粛清委員会、国家保安委員会、ソ連邦検事総長職など)の自立化の悲劇などである。逆にいえば、この前史に終止符を打ち、本格的な恐怖政治のシナリオに従っておこなわれたキーロフ暗殺後、国中を吹き荒れた「腐ったリベラリズム」告発のキャンペーンの政治的、思想的意味を改めて教えている。私たちはこれから、この前史を少し詳しくたどることにしよう。

既に述べたように、1929年-30年におけるスターリンの「対右派」党内闘争の勝利の要因の一つは、一枚岩的な党の観念、即ち全黨員の一致した行動を求めるだけでなく、考え方も同じでなければならないとするあの恐ろしい観念であった。スターリンが中央委員会と政治局において多数派を形成することができたのは、政府ソヴェト機関に対する党機関の独裁という問題をめぐってであった。「第二の内戦」という深刻な危機状況においてスターリン

は、トロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフら「左翼反対派」との闘争において確立した一枚岩的な党の観念を論理的=心理的な武器として、党機関の独裁を押し進め、「階級としてのクラーク富農の絶滅」のスローガン（「階級闘争激化」論）のもとに人民独裁を強化した。そのさい彼は、いわゆる「ウラルーシベリア方式」のような農村における突然の強制的集団化の政策の場合だけでなく、その対外政策（「アングロ・サクソン」に対する共同闘争のためのドイツ軍国主義者との同盟）の実施においても、党機関に対して既成事実をつきつけつつ事態を処理し、党内多数派を結集しようとした。

だが強制的集団化の恐怖とそれに関連する党内闘争の過程で、膨大な数の農民が殺され、餓死し、そして強制収容所に送られただけでなく、多数の共産党員も粛清されるのでなければ絶望のうちに自殺し、あるいは気が狂ったのであった。ブハーリンは、この「上からの革命」の残酷さが支配政党をいかに非人間化していったかを証言している。

私は集団化の前にも多くのことを見てきた。1919年に私がチェ・カ（非常委員会—引用者）の処刑権を制限したとき、ウラジーミル・イリイチ（レーニン—同）は、チェ・カの参与会への投票権をもつ政治局代表として私を任命する決議を通した。レーニンは、「彼自身をそこへ行かせよう。そして、できるものなら恐怖^{テロ}を制限するようにやらせてみよう。我々はみな、彼が成功すれば非常に喜ばしく思うよ」と言った。そして実際問題として、私は敵にも見せたくないようなものをいろいろ見た。しかし1919年は、1930年から1932年の間に生じたことと比較することはできない。1919年には、我々は生命をかけて戦った。我々は人々を処刑したが、我々もまたその過程では生命をかけていた。しかしながら、あとの時期の場合は、我々は、完全に無防備な人々をその妻子とともに大量に殺害していた。（XLI,ニコラエフスキー, 34）

しかし、ブハーリンの意見によれば、恐怖支配と農村飢餓の最悪の結果は、農民の受難それ自体ではなかった。それはまた、この集団化運動に参加して、気が狂う代わりに職業的官僚になり、「恐怖^{テロ}を行政の正常な方法とみなし上からのいかなる命令に対する服従をも高潔な美德とみなすようになった共産党員たちの心理状態の深刻な変化」であった。彼は、「恐ろしい機械のなかの歯車」として働いている人々の「本当の非人間化」について語った。（同）彼は、ポリシェヴィキ革命の初期に、経済管理者という新しい階級の独裁の成長を予見した独創的な理論家ア・ア・ボグダーノフの議論に与しなかったが、いまや「上からの革命」に伴う新しい独裁階級の創出に戦慄せざるをえなかったのである。

しかしながら、ブハーリンのこのような見解と消極的抵抗に共感する人々もまた、スターリン支配ブロックの内外にいた。1930年から33年の時期にかけて、スターリン支配とその政策に対抗・反対するいくつかの運動がおこった。1930年の最初のもは、シルツォフ＝ロミナーゼ・グループ事件であった。それまでスターリンの追従者であり、彼によってロシア共産党中央委員会政治局員候補とロシア共和国人民委員会議長に引き上げてもらったばかりのシルツォフと、同じく中央委員のロミナーゼは、さまざまな地方の党書記、とくにザカフカズ党第一書記カルトヴェリシヴィリと共産青年同盟指導者シャツキンらの支持をうけて、スターリンの権力を制限しようとした。彼らは、党＝国家の権威主義的支配、危険な経済政策、労働者の創意の窒息、人民への恐怖支配を批判する覚え書を流布させたといわれている。だが彼らとその準備を完了する前に摘発され、同年12月に除名された。このグループのうちロミナーゼは1935年自殺し、その他の人々は粛清のなかで死んだ。(XXXIX, コンクエスト, 57)

強制的集団化による大量逮捕・追放・処刑や数百万人(500万人以上)の生命を奪った「組織的飢餓」、食糧配給の不足によって飢えていた労働者を「神話」とさまざまな弾圧法令とによって「超工業化」にかりたてたことによる「クロンシュタット反乱」的状況の現実化——このような事態の恐ろしさに多くの党員が震えていた1932年に、リューチン＝スレプコフ・グループ事件がおこった。イルクーツクの農民の息子であり、革命後シベリアとモスクワでめざましい働きをし、1927年から28年には最も重要な地区の一つであるバウマン地区の書記になった右派ポリシェヴィキのリューティンは、31年から32年にかけて、スターリンに対する反対派の結集を呼びかける綱領を作成し党内のおもな筋に流した。この「リューティン綱領」は、農民のkolhoz離脱の自由と経済的自決の承認、工業投資の縮小、それに党内民主主義の復活を主張していた。しかしこの綱領が注目されたのは、その痛烈なスターリン批判のためであった。それは、もしスターリンが党支配者の地位から排除されないならば、党と国家の破滅は避けられないという根本的な主張を含んでいた。スターリンは、「執念深さと権力欲に刺激されて革命を破滅の淵にまで導いたロシア革命の悪魔」として弾劾された。

(XLI, ニコラエフスキー, 44; XXXIX, コンクエスト, 57-59; XXXVII, メドヴェーデフ〔上〕, 229-30; LXXIX, Tucker, 59) スターリンの「総路線」を根本的に批判したこの綱領は、中央委員会を含めて党内に大きな議論をまき起こしたといわれる。

スターリンは、この綱領を彼スターリン暗殺の呼びかけであると解釈し、リューチン自身の処刑だけでなく、この文書の流布に関係した者たちの処刑をも要求した。スターリンは、^{オ・ゲ・ベ・ウ}統合国家保安部が政治局の介入なしで銃殺することを望んだが、統合国家保安部はこの問題を党の中央統制委員会に付託した。中央統制委員会は、規律問題を独自に決定する機関であ

り、その長には現職の政治局員があたるが、その間は政治局員としての資格はなくなることになっていた。レーニン死後、このポストは一連のスターリン主義者によって独占されてきた。中央統制委員会幹部会は、リューティン事件は単なる規律問題の域をはるかに越える政治問題であり、党内反対派の政治活動に対する死刑を禁じたレーニンの遺言(相互殺戮というジャコバン党の誤りを避けよという命令)にかかわる問題であるとして、事件を政治局に委ねた。政治局での議論は白熱したものであったといわれている。そのなかでとりわけキーロフは、かつての「レーニン主義的」原則にたって死刑の適用に強く反対し、政治局を自分の意見にまとめることに成功した。キーロフは、オルジョニキーゼ、クイブイシェフ、コシオール、カリーニン、ルズタークによって支持された。(このグループのうち大粛清を生きのびたのはカリーニンだけであった。) スターリンを支持したのはカガノヴィチだけであった。モロトフ、アンドレイエフさえ動揺していた。(XLI,ニコラエフスキー, 45, 82; XXXIV,コンクエスト〔上〕, 58)続いて開かれた中央委員会総会(1932年9月28日-10月2日のいわゆる「9月総会」)においても、圧倒的多数はキーロフ穏健派ブロックを支持し、スターリンは敗北した。それは中央委員会総会における彼の初めての敗北であった。彼がこの敗北から学んだ教訓は、純粹に政治的な罪で古参ボリシェヴィキを処刑することについて、追隨者たちの同意を取りつけることは容易でないということであった。同時にスターリンは、自分の政治局の同盟者の抵抗を打ち破ることは容易ではなく、また何らかの政治的口実で解任することが困難である人物が存在することを学んだ。

他方穏健派ブロックの方も、スターリンとの公然たる闘争を開始しようという気はなかった。中央委員会総会で、リューティン・グループは「共産主義とソヴェト政権の敵となった墮落分子として、また偽のマルクス=レーニン主義の旗をかかげて、ソ連邦に資本主義とくに富農制を復活するために、ブルジョア・富農組織をつくりだそうとした党と労働者階級の裏切者として」、除名され、政治犯隔離所あるいは国外に追放された。党機関紙は、「リューチン一派」を「死滅しつつある階級敵の死にもの狂いの痙攣」と呼び、激しく攻撃した。旧反対派の多くの者も、綱領を読んだのにそれを当局に報告しなかった廉で弾圧された——ジノヴィエフとカーメネフは除名とウラルへの追放、イワン・スミルノフは再逮捕と10年の入獄、スズタルは「隔離所」、スミルガは5年の刑でムラチコフスキーとともに強制収容所に追放。

さらに1933年1月12日の中央委総会は新しい全般的粛清にかんする決議を採択した。この年だけで80万人以上の党員が除名され、翌年にも34万人が除名された。またこの1月総会では、新しい「陰謀」事件が摘発された。古参ボリシェヴィキで元中央委員会組織局員のA・

P・スミルノフと二人の古参ボリシェヴィキ、エイスマントとトルマーチョフが、モスクワやレニングラードの労働組合内に反党グループをつくったとして告発された。彼らの綱領には、不均衡な工業計画の是正、大部分のコルホーズの解放、労働組合の独立、統合国家保安部の党のもとへの統制が含まれていたといわれる。だが何よりも彼らは、スターリンの罷免を討議した。この時もまた政治局は、カガノヴィチをのぞいて、スミルノフ・グループの銃殺に反対した。中央委員会と中央統制委員会は、エイスマントとトルマーチェフを、「党と党指導部に対する闘争を組織しようと企てた墜落し変質した反ソ的人物」として除名し、スミルノフをソヴェト共産党中央委員会から除名するとともに、中央委員トムスキーとルイコフ、同候補シュミットを、反党分子と積極的に闘わず、その結果として実質的に彼らの反党活動に動機を与え、鼓舞したとして警告した。(XXXIV,コンクエスト〔上〕, 60; XXXVII, メドヴェーデフ〔上〕, 250)

強制と「神話」を唯一の経済的潜勢力とし、経済的合理性を無視して押し進められた集団化と工業化は、農民と労働者をふくむ広範な民衆の不満を増大させた。戦時共産主義政策の復活は、再び深刻な危機を生み出し、「クロンシュタットの心理」を醸成しつつあった。スターリンとその指導部は、この危機を「階級闘争激化論」によって強行突破しようと、主に「階級としての富農」撲滅運動を——残酷な弾圧によって——展開した。しかし食糧と工業製品の供給の危機を全て富農や「亜富農」のせいにするにはできなかった。スターリンと治安機関は、政策の誤謬の責任を転嫁し、不満をそらすために、身代りを見つけださなければならなかった。この贖罪の山羊として指名されたのが、革命前に形成されていた専門家とインテリゲンツィアであった。これらの旧インテリゲンツィアと「ブルジョア」専門家たちの多くは、ソヴェトの経済機関、工業企業、科学と教育の機関、国家計画委員会、統計官庁等で働いていた。レーニンも、これらの専門家の知識と技術が革命後の新社会の建設に不可欠であることを強調し、かれらの登用を推挙していた。

我々が搾取者の手に一撃を加え、無害にし、とどめを刺したところで、まだ仕事の半分しかやったことにはならない。わがモスクワの責任ある活動家100人のうち約90人までは、万事このことに、すなわちとどめを刺し、無害にし、手に一撃を加えることに尽きると考えている。(中略)しかし、これは仕事の半分ではないか。(中略)1918年にさえ、これは仕事の半分にすぎなかったのだが、いまではこれは、仕事の4分の1にさえたりない。

(XLVIII, レーニン, 296)

スターリンとその補佐は、工業化実施上の誤算と混乱の責任を転嫁するために、社会主義建設に必須の知識と経験をもつ「ブルジョア専門家」のカードルを粉砕し「とどめを刺」そうとした。その典型は、これらのスケープ・ゴートの供儀の演劇化として、1928-31年に上演された政治裁判であった。これらの政治裁判は、大粛清時代の恐怖政治の完成に必要な不可欠であった見世物裁判（モスクワ裁判）の演出の予行演習ともなった。

まず1928年に、「シャフトイ事件」の公判が開かれた。（XXXIX,コンクエスト〔下〕,付録F）被告は石炭産業で働く技師53名（ロシア人50人とドイツ人3人）であった。彼らはカフカースのシャフトイ市とその地域で、旧炭坑主と陰謀を結んで炭坑災害と破壊を組織し、無用な輸入装備を買ったとして告発された。告発状によれば、彼らはまた、海外の白衛派センターから資金提供をうけていた。実際1928年にはいくつかの炭坑で、坑内浸水、爆発などの大災害が多数発生した。カフカース内務人民委員部経済部長ガザリヤンは、これらの大災害の原因を犯罪的な不当管理に帰した。だがこの大規模な技師破壊活動事件の最初の創作者は、カフカース内務人民委員部の代表イー・ゲー・エフドキモフであった。エフドキモフは革命前は普通の刑事犯であったが、革命によって釈放され内戦で名前をあげて、スターリンと休暇をとるほどの特別の友人となった。彼は、シャフトイ市に技師妨害活動組織が存在することを、統合国家保安議長メンジンスキーに報告した。メンジンスキーは、何一つ証拠のないこの告発に対して、もし2週間以内に適当な申し立てをしなければ逆に妨害活動で告発すると言った。追いつめられたエフドキモフは、スターリンのところへ行き、白紙委任状をもらって技師たちを逮捕した。メンジンスキーは、ルイコフと国民経済会議議長クイブィシェフの支持をえて、この逮捕に強く反対した。スターリンは、事件のもみ消し策動がおこなわれていることをほめめかすエフドキモフの電報を示して、この反対を黙らせた。スターリンの政治的動機は、党外専門家のカードルとの平和的協力を追求するブハーリン路線の信用を落し、社会主義が成長すればするほど階級闘争は激化するという自己の理論を証明することであった。彼は1928年4月のある演説で、「一般的結論」として、「我々は内部の敵をもっている。我々は外部の敵をもっている。このことを、同志諸君、いつときも忘れてはならない」と述べた。（XXXVII,メドヴェーデフ〔上〕,185-187）

事件は、モスクワで、裁判長ヴィシンスキーと検事クルィレンコのもとで、公開裁判に付された。被告のうち10人が、妨害活動とスパイ活動を自白し、6人が部分的な自白をした。自白以外の証拠は1つも提出されなかった。公開裁判は、テロでひき出した自白のみに支えられていたが、それでも「破壊活動家を死刑に」という新聞の大宣伝活動のためにも重要であった。被告の1人の12歳になる息子が死刑要求者のなかに加えられてもいた。苛酷な拷問

と取り調べをうけて、少なからざる被告は自白した。ある者は気が狂い、ある者は自殺した。何人かは法廷で自白を取消そうとしたが、翌日再確認させられた。しかし、きっぱりと無実を主張し、未来のもう1人のゾラによって「私は告発する」が書かれることを断言した者もいた。法廷は53名の被告のうち4名を放免し、4名を判決猶予、10名を1年から3年の禁固に処した。被告の大部分は4年から10年であった。11名に銃殺刑が宣告され、うち5人は1928年7月に処刑された。残りの6名は捜査当局に協力したとして中央委員会により減刑された。のちに2人の被告ボヤルィシニコフとミルレルは、監獄で作家シャラモフに出会った時に、彼らのうけたさまざまな拷問について語った。独房監禁や熱床房、寒床房の他に、既にあの恐ろしい「コンヴェーヤー」(被告を眠らせない連続尋問)が用いられた。また古参ポリシェヴィキのドゥルマシキンは、収容所で1937年に15年の判決をうけた内務人民委員部の前任者に出会った時、シャフトィ裁判の告発が「つくりごと」であったことを聞いた。

スターリンは、ソヴェト国家と革命を破壊するために、忠実な市民や有能な専門家のマスクをかぶりつつ秘密結社に集まり、旧所有者と西側の反革命資本家組織から金をもらっているブルジョア専門家の経済的反革命陰謀を、党とソヴェトの全機構のなかで摘発するよう要求した。彼は1929年4月の中央委員会で次のように語った。

いわゆるシャフトィ事件を偶然とみてはならない。「シャフトィ事件の同類」は、いまやわが工業のどの部門にもいる。彼らの多くはつかまったが、まだすっかりつかまったわけではない。ブルジョア・インテリゲンツィアの妨害活動は、発展しつつある社会主義にたいする最も危険な反抗形態の一つである。妨害活動は、それが国際資本と結びついているだけに、一層危険である。ブルジョアの妨害活動は、資本主義的分子がまだけっして武器を捨てたわけではなく、彼らがソヴェト権力に対する新しい行動のために力を蓄積していることの疑いのない証拠である。(XLVII, スターリン, 28)

スターリンは、公開裁判を演出することによって、ソヴェト国家並びに党の内外の「敵」を供儀に供し、もって恐るべき危機をまねいたことに対する批判と反対を封殺しようとした。この公開裁判は、大粛清に至る後の裁判の土台として役立つ先駆的なモデルとなった。だがもう一つ、より重要なことは、ひとたび内務人民委員部の手によって犯罪容疑がでっち上げられ調査されると、このようなでっち上げを批判する者は——たとえ政治局員であろうとも——、犯罪者を擁護し内外の敵に密通する者という烙印を押される、そのような状況が生み出されたことであった。現代の「ウィッチクラフト裁判」としての見世物裁判の、それは重

要な機能でもあったのである。

スターリンの「シャフトイ事件の同類」告発の叫びは、直ちにその反響を見出した。1929年、ウクライナをロシアから分離するためにポーランドと秘密同盟を結んだとされる、いわゆる「ウクライナ解放同盟」の政治的公判が開かれた。その指導者は有名な歴史家フルシェフスキーとウクライナ科学院副院長エフレイモフであるとされたが、真の標的はウクライナのポリシェヴィキ指導者の一人で、ロシア共産党中央委員、コミンテルン執行委員のスクルイプニクであった。彼はかつて何度かレーニンの党の時代に、ウクライナにかんする民族人民委員スターリンの行動を厳しく批判したことがあった。30年代のはじめに彼は、連邦構成各共和国の権利を一貫して制限しようとしたスターリンに対して、多くの国際主義黨員とともに抗議した。スターリンはこの「民族主義的偏向者」に対する大規模な中傷カンパニアを展開した。スクルイプニクは、ウクライナ教育人民委員部と全教育機関（高等学校、職業学校、科学院、出版社、作家組織）が破壊分子と民族主義的反革命分子によって「汚染」されるのを意識的に見過ごしたと非難された。ウクライナの文化活動家の威信は傷つけられ、解職、逮捕の弾圧をうけた。スクルイプニクは、かれに対する中傷攻撃の結果として、1933年自殺した。(XXXVII, メドヴェーデフ〔上〕, 187, 227-8)

1930年には、新たな反革命組織、いわゆる勤労農民党(T・K・P)が告発された。(同, 188) 著名な経済学者コンドラティエフや農学者ドヤレンコなどを指導者として、T・K・Pは、農業協同組合と農業信用機関、農業人民委員部と財政人民委員部、新聞「ベドノター(貧農)」、農業経済研究所およびティミリャーゼフ農業アカデミーに、反革命地下グループを組織したとされた。また地方の農業機関と旧富農、社会革命党の間にも多数の地方黨員を擁していると見つめられた。コンドラティエフ派は、富農の利益を擁護しただけでなく、ソ連邦内でも特殊の形態で作用しているとされる商品-貨幣関係の法則を考慮に入れる必要を擁護したとして、告発された。若干の農学者は、休閒輪作を主唱したというので破壊活動のレッテルをはられた。統合国家保安部は大がかりな公判を組織しようとし、公開裁判の完全な予行演習もおこなわれたが、何らかの理由で開かれなかった。逮捕された「勤労農民党の同盟員と指導者」は、秘密裁判で有罪を宣告された。

同じく1930年秋には、食料供給系統におけるサボタージュとスパイ組織が摘発された。旧地主や貴族、工業家、カディット、メンシェヴィキという雑多な人々からなるこの組織は、最高経済会議、貿易人民委員部、肉・野菜・魚・果実等の企業合同などの機関の責任ある地位に喰い込み、多くの都市への食料品供給を妨害し、食肉価格を騰貴させ、飢餓をつくりだすことに成功したとされた。46名の被告は全員、秘密法廷で銃殺刑を宣告され人知れず消え

て行った。

ゴ ス プ ラ ン

1930年11月25日から12月7日まで、新しい見世物裁判が開かれた。主に国家計画委員会の高官で有名な科学技術者からなる8名の被告が、約2000名からなるいわゆる「産業党」の執行委員として、破壊活動とサボタージュを組織し、帝国主義国家の干渉と武力によるソヴェト権力の顛覆を準備したとして、告発された。8名の被告は、熱機関研究所長ラムジン教授、ゴスプラン燃料部長ラリチェフ、ゴスプラン生産部副部長・空軍アカデミー教授カリンニコフ、国民経済最高会議科学技術評議会議長チャルノフスキー教授、繊維科学研究所参与会議長フェドートフ教授、国民経済会議繊維組織技師長クープリャーノフ、国民経済最高会議科学研究部長オチキン、技師シトニンである。これらの被告たちは、フランス大統領ポアンカレ、アラビアのロレンス、石油王ディターディンク卿その他のために働き、ソヴェト工業を破壊しようとした、とされた。再び新聞の大宣伝がおこなわれ、銃殺を要求する集会の波が国中にひろがった。またもや被告シトニンの息子が父の死刑を要求した。被告以外には誰れも証人はおらず、自白以外いかなる証拠も提出されなかった。裁判の過程で起訴状や自白には、多くの矛盾やくい違いがあることが明らかになった。被告の「誠実な自白」のなかでは、かつての大産業家で将来の商工大臣に擬せられていたリャブシンスキーとの接触（1928年10月）が詳しく述べられ、彼の妨害活動指令の日付けも明らかにされていた。ところが外国の新聞報道によってリャブシンスキーは数年前に死んでいることが明らかになった。検事クルィレンコは、資金もなく産業家でもなかった息子を掘り出してきて、無器用な切り換えをしなければならなかった。また「産業党」の将来の大蔵大臣に予定されていたヴィシネグラドスキー（ツァー時代の蔵相）も、数年前に死亡していた。フランス大統領ポアンカレも、フランス参謀本部による反革命干渉計画の捏造に抗議する声明を発表した。いかなる参謀本部であれ、主要攻撃方向、上陸地点、時間表を含むこれほど重大な作戦計画を、ラムジン教授のような1人の学者に告げることはありえないであろう。検察当局は、被告たちの指示や指令、「党员」へのアピール、回状や決議、総会記録の存在を指摘したが、それらの証拠文書のどれ1つとして法廷に提出することはできなかった。また被告たちの、反革命組織を確立する政治的、物質的動機についての説明も、支離滅裂であった。科学研究機関と生産現場との接触が不十分なことも破壊活動だと断定された。国境地帯の沼沢地排水も、それが帝国主義者の干渉を容易にするからという理由で、破壊活動と断定された。裁判長ヴィシンスキーは、5人の被告に死刑を宣告したが、中央委員会の政令により全ての判決が減刑されてさまざまな刑期の禁錮にかえられた。数年後ラムジン教授は釈放され、元の地位に戻った。(XXXIX, コンクエスト〔下〕, 付録F; XXXVII, メドヴェーデフ〔上〕, 189,196-200)

「産業党」裁判につづいて1931年3月に、もう1つの政治裁判、「メンシェヴィキ中央委員会全国ビューロー裁判」がモスクワでおこなわれた。(XXXIX, コンクエスト〔下〕, 付録F ; XXXVII, メドヴェーデフ〔上〕, 190-193, 201-221) 14名の被告の大多数は、1920年から22年にかけて党を離れ、経済機関その他の専門家として尊重されていた。彼らは20年代の終わりに秘密のうちにメンシェヴィキ党に再加入して、ソ連邦内にセンターを組織し、破壊活動を企てたと告発された。とくに経済発展計画(5カ年計画)の計画目標を系統的に引下げることによって工業と農業の発展速度をおとし、ソ連経済を破壊しようとした廉で告発された。また、「全国ビューロー」は、「産業党」および「勤労農民党」と秘密ブロックを結成し、外部からの武力干渉とそれに呼応する国内蜂起を準備したと言われた。起訴状のシナリオによれば、「産業党」は、武力干渉に参加する各国代表と予備交渉をおこない、破壊とテロル活動のための遊撃工兵団を組織し、赤軍最高司令部内の協力者と軍事陰謀を打ち合わせすることになっていた。他方、「勤労農民党」は、農民蜂起を組織して武器弾薬を供給する予定であった。「全国ビューロー」は、政府機関を押さえて臨時政府を宣言し、これを支持する都市市民群を組織することになっていた。

またもや「裁判」の過程で多くの矛盾と背理が露呈した。亡命メンシェヴィキの指導者アブラモヴィチがモスクワを訪問し、国内のメンシェヴィキと連絡をとりあっていたとされたが、西側の多くの証人によって、彼がモスクワにいたとされた時期には社会主義インターナショナルの大会に出席しており、その訪問が不可能であったことが証明された。「産業党」との秘密協定についても幾つかの矛盾が明らかになった。「産業党」裁判(1930年12月)のとき、既に「全国ビューロー」の主だった人物は全て逮捕されていたにもかかわらず、いかなる結びつきも実在人物も論及されなかった。また起訴状によれば、両者の共謀は、1930年4月の「全国ビューロー」第三回総会で討議されたことになっていたが、前回裁判の証言では「産業党」は1930年4月までに解散していたのであり、メンシェヴィキが連絡をつけることは不可能なはずであった。起訴状は被告スハーノフの調書によって彼が「産業党」のラムジン教授と会い2回にわたって計3万ルーブリを受けとったことにしていたが、裁判ではラムジンは、スハーノフという人を知りもしないし、会ったこともないと断言した。その結果、金を渡したのは「産業党」のラリチュフであり、受けとったのはスハーノフではなくグローマン(ゴスプラン幹部会員)であると「訂正」された。5カ年計画作成における「破壊活動」の実例は、被告の計画作成者たちの経済的合理性と彼らの予測の正しさを証明した。彼らは、実際の能力よりも過度に低い生産目標を定め、もってソ連経済を破壊しようとしたと告発された。例えば、鋼の生産では、彼らは1932年について580万トンという犯罪的な目標数値を提

案したと非難された。計画は1030万トンに定められた。公式統計によれば、実際の生産は590万トンであった。銃鉄では彼らは、わずかに700万トンの生産を提案した。計画は1700万トンとされた。1932年の結果は610万トンであった。ソヴェトの公式の数字は、自動車生産10万台を含めて Gosplan の計画指標が、スターリンとモロトフの非現実的で「犯罪的」な計画に対する専門家の合理的な警告であったことを証明した。

法廷は、被告14名全員に5年から10年の禁固を宣告した。海外から非合法に入国し逮捕された本物のメンシェヴィキ2人（プロイドとブラウステイン）は、裁判に参加しなかった。それは、彼らが当局にでっち上げの協力（つまり虚偽の自白）をしなかったからである。著名な歴史家スハノフは、協力（自白）すれば秘密に釈放し報償を与えるという約束を与えられていたが、その約束が守れなかったので仲間の囚人に事件全体を暴露し、最後に長期にわたるハンストをおこなったといわれている。彼はその後釈放されたが、1937年またもや逮捕され銃殺された。裁判の主要被告の1人ヤクーボウィチ（貿易人民委員部食糧部副部長）は、24年間の監獄と収容所の生活、それに療養所生活に耐えて生き残った。彼は、1966年夏、ロイ・メドヴェーデフに「全国ビューロー」の裁判劇のシナリオがどのようにしてでっち上げられ、上演されたかを証言し、1967年5月にソ連邦検事総長宛に特別上申書を送付した。政治裁判の準備過程を明らかにするその上申書の中で彼は、犠牲者から自白をひき出すさいの拷問の技術をいくつか報告している。或る者には自由と将来の利益が約束された。拒否する者には容赦ない暴力が加えられた——顔、頭、性器が殴打され、床に投げ倒され、血の気がひくまで喉をしめられ、恐るべき「コンヴェーヤー」^{カルツェル}にかけられ、懲罰監房（半裸体、素足にとっては凍え死ぬような寒い房、または耐え難いほど暑くて窓のない息づまる房）に入れられた。また或る者は、帝制時代に異教徒を監禁するために使用され、より強力な拷問設備を整えたスーズダリの修道院監獄に送られた。だが現代の「異教徒」たちにとって最も恐ろしい拷問は、神経組織を破壊し、極度の消耗状態に陥入らせるほどに睡眠を禁じられることであった。経済学教授ルービンも、独房監禁から釈放後、流刑地アクチュビンスク市で、妹に虚偽の自白を強要された事情を語った（彼は1937年の大量弾圧の際再び逮捕され、その後の消息は誰れも知らない）。ルービン教授は、1926年からマルクス・エンゲルス研究所員となり、所長リャザーノフから大きな信任をうけていた。ルービンの逮捕は、スターリンに憎まれていたリャザーノフをおとし入れるためであった。リャザーノフは、スターリンが新しい国民的信条としての「一国社会主義」論を掲げて、単に党運営の魔術師（書記長）だけでなく新しいドグマの創始者たらんとしていた時、ある党の理論的討議にさいして怒りと嘲笑のまじった野次をとばしたことがあった——コーバ、止めろ。バカな真似をするな。理論的なことがお前の持ち場でない

ことは誰れでも知っているぞ。(XXXIII, ドイッチャー, 233)スターリンは、この古参マルクス主義理論家の野次を決して忘れなかった。リャザーノフは、「全国ビューロー」裁判開始前に、「党を裏切り、干渉支持メンジェヴィキを直接に援助した」廉で、自分が創設した研究所から解職され、党から除名された。彼はのちに逮捕され、一時釈放されたが大粛清の時に「蒸発」して1938年に死んだ。尊敬する所長リャザーノフをかばおうとしたルービンの「自白」もまた、一ヶ月以上にわたる苛酷な拷問の結果であった——人間の背丈の石牢で、動くこともできないズーダリの懲罰監房^{カルツェル}での拷問、独房でのあらゆる種類の嘲笑、一分たりとも眠らせない連続夜間尋問、地下牢での拷問と同房囚人の銃殺による自白の強要(ルービンが自白しないからお前を銃殺する、という恐ろしい脅迫)等々。

大粛清の前史の最後の「見世物裁判」は、1933年4月のメトロ=ヴィカース裁判であった。(XXXIX, コンクエスト〔下〕, 付録F) 被告18人のうち6人がイギリス人であった。主題は、イギリス人技師が妨害活動の徒党を組織したということであった。この事件は、将来の政治裁判劇にたいする最後の総仕上げの舞台げいこであった。イギリス政府の外交上の圧力やイギリス人被告人人質(家族)の欠如、彼らの非協力などによって幾つかの困難に直面したが、舞台監督や演出家たちは数多くの教訓を引き出した。裁判長ウリリヒ(元NKVD役人)と検事ヴィシンスキーの最適コンビは、将来の見世物裁判を全て手がけることになった。また事件の筋書きを複雑にして、普通の観察者や読者ではその細部を理解するのを困難にし、全体としての印象だけを残すようにするのが有利であることを学んだ。政治見世物裁判の演出のためには、被告の数は18人前後が適当であることがわかった。拷問の技術学の精緻化もはかられた。自白や証言のなかに矛盾やありえないことが含まれていても、大部分の人は批判的にものごとを考えない、というスターリンの不動の原則もまた証明された。ソヴェトの人民は、膨大な新聞の大宣伝や集会の波において、検閲済の説明を受け入れ、忠実な党員は公式声明をそのまま受け入れる以外に選択の途はなかった。こうして見世物裁判としての政治裁判は、経済の失敗に対する身代わりの山羊としての役割を果たすことが改めて確認された。供儀の演劇化は、重大な失敗の責任を他に転嫁するのに不可欠となった。それはまた、^{ベルソナ}仮面をつけた「内部の敵」による悪の穢れからソヴェト社会を浄化=粛清するのにも、必要不可欠であった。もちろん非公開の裁判も、秘密の銃殺も、収容所の戦慄すべき条件による事実上の大量殺人もおこなわれた。しかし舞台裏での処刑だけでは、危機のエントロピーを放出することはできなかつただけでなく、逆に蓄積することになった。儀礼としての供儀の演出は、国民的エントロピーの放出のためにも必要であった。

危機の間、党と政府が生き残るか否かの必死の闘いをやっている時には、スターリン派党

指導部はスターリンを解任できなかった。「一枚岩としての党」の神話と、戦争と反革命によるソヴェト国家と党の危機という理由が、これに役立った。ルイコフ、トムスキー、ブハーリンは左翼反対派としての協調を求めた彼らの支持者と絶縁して、再び自分自身の見解を非難した。ジノヴィエフとカーメネフは、新たな虚偽の告白をしてシベリアから連れ戻された。トロッキーは、こうした自己非難と自説撤回による屈服について、「スターリンはゴーゴリの主人公のように生ける魂がないので死せる魂を集めている」と論評した。(XXXIII, ドイツチャー, 第2部, 43) 追放中の最後の反対派指導者ラコフスキーとソスノフスキーも、戦争の危機を主な動機として党と和を結んだ。トロッキーでさえ、「スターリンを倒せ」というスローガンは反革命に奉仕することになり間違いであると書いた。(同, 45) このかんに、既に述べたように、党と指導者装置に対する物神崇拜が育成されていった。党、ソヴェト国家、革命、プロレタリアートなどの概念に対する宗教的崇拜の態度、個人は誤っても全体としての党は誤るはずはなく党は全てを知っているという信念、党に対してはいかなる内心の秘密もあってはならず神に懺悔するように全てをうちあけねばならないという信仰、党と国家のためには何でもしなければならぬという共産主義者の責務、革命はいかなる非情をも正当化するという脱人間性——これらが党独裁とスターリン独裁を強化していったのである。

他方、集団化運動と第一次5ヶ年計画の恐怖と苦悩を忘れることができるかもしれないという希望が党内に生まれた時、勝利者スターリンは余りに強大で解任できなかった。しかし解任できないとしても、党内和解を進め、党と人民との結びつきを再建することを望む声が高まりはじめた。このスターリンの指導という問題に対して、スターリンはあくまで他人の介入を許さない権力を求めた。スターリンの不安は、勝利者であるにもかかわらず、否あるが故に非常に大きかった。そして彼の神経は極度に張りつめ、一瞬たりとも和らぐことはなかった。彼が依拠した政治警察は、全ての者に行為においてだけでなく考えることにおいても完全な服従を強制した。この全体的思想統制によって、公共生活から一切の討議が消え去り、人々は私的会話でさえ意見の交換をしなくなった。不可謬で全能のスターリンは全てを征服した。しかしなにひとつ確実ではなかった。民衆の沈黙の眼差しのなかには、深い憎悪と怨恨が息苦しいまでに満ちていることを感じていた。弾圧すればするほど、その怨恨が膨れあがるのを見た。このような民衆の沈黙の恨の眼差しに彼の神経がうち震えていた時、悲劇は独裁者自身の家庭にも及んだ。1932年11月のある晩、スターリンとその妻ナージャ・アリルーエヴァは、ヴォロシーロフの家庭を訪れた。その席には他の政治局員もいて、政策上の諸問題を話し合っていた。ナージャ・アリルーエヴァは、国内の飢餓や不満、恐怖政治が党にもたらした精神的荒廃について、日頃感じていることを素直に語った。膨大な民衆の

沈黙の怨恨に恐れおののいていたスターリンは、同僚の面前で突然、口汚い罵詈雑言を洪水のように妻に浴びせかけた。彼女はヴォロシーロフの家を逃げ出した。その夜彼女は自殺した。(XXXIII, ドイツチャー, 第2部, 30; XL, ドイツチャー, 182)

スターリンの不安と恐怖は、非常に大きかった。彼は、敗北した反対派や敵たちが民衆の不満に乗じて立ち上がり、彼の権力を奪取して復讐するのではないかと恐れた。また最も身近な協力者——そこにはキーロフがいた——に対してさえ不信を抱いていた。彼らのなかにもスターリンの指導に嫌悪を感じ、いまや党と人民の間を架橋し、党内融和を回復することが必要だと考える者がいたからである。のちにみるように、スターリンは、自分にとって代わるもっと穏健な指導部の出現に直面していたのである。こうして、独裁者とその神話は、「疑惑と陰謀とテロルの悪循環」(ドイツチャー)にはまりこんでしまった。彼の頼りは、用意周到に自分自身の手下を配置してきたテロルの機構であった。しかしそれを党員に対して用いるには党の最高機関の同意が必要であったが、リューティン事件その他でみたように、政治局はそれを拒絶した。スターリンに残されていた方法は、何としても彼らが同意するような状況をつくり出すことであった(——キーロフ暗殺)。しかし暫くの間スターリンは、大粛清そのものに着手するのではなく、恐怖政治の技術的土台を打ち固めることに努めた。まず、1932年にスターリンに最初の敗北をもたらすきっかけとなった中央統制委員会は、その地位を引き下げられ、政治局からの独立の各残りさえ失った。その議長ルズタクは政治局員候補に降格され、新しくカガノヴィッチが長となった。1934年7月10日、^{オ・ゲ・ベ・ウ}統合国家保安部は、改組された^{エヌ・カ・ヴェ・デ}内務人民委員部に吸収された。その長には、^{グ ラ ー ク}矯正労働収容所管理本部(1930年設立)の長であったゲンリフ・ヤゴダが任命された。その1ヶ月前には、緊急布告によって「人質の原則」が確立され、拷問の技術体系のなかに親族への圧迫を組み入れることが「合法」化された。この政令によって、家族の一員が犯した反逆罪に対する全家族の集団責任が課された。また、国家に忠誠でない血縁者を当局に密告することを怠ったものは厳罰に処せられることになった。ヤゴダの第一代理は、スターリンの古い取巻きであり友人であるアグラノフであった。この新機関は、その後能率的に拡大され、特権と権力を増大させた。その記章(剣で斬り殺される蛇)は鎚と鎌の党員記章より優位に立ち、政治局員以外誰れもその監視を免れることができなかった。スターリンの統制にのみ服するこの新しい「プリヴィリゲンチャ(特権階層)」たちは、教育のある古い階級出身のスマートで美人の女と結婚した。彼女らは、この結婚によって、その出身階級の故に強制される不幸を免れることができた。

本来の政治警察機関の他に、重要な専制組織が設置された。1933年1月に次回の党粛清が発表されたのをうけて、4月には中央粛清委員会が設けられた。中央委員会特別部もこの時

期に表面に現れた。それは事実上スターリン個人の書記局であり、彼の意志を実行する直接の機関であった。この個人的書記局との関連で、特別の「国家保安委員会」が組織された。その主な人物のなかには、当時中央委員会「経歴と配置」部の長エジョフがいた。1933年6月、ソ連邦検事総長職が設けられた。「合法性」と「規律」を点検するこの組織の最も重要な人物は、アンドレイ・ヴィシンスキーであった（もっとも当初は検事総長第一代理であった）。（XXXIX,コンクエスト〔上〕, 67-68;〔下〕付録E「NKVDの来歴」）以上のような恐怖政治の技術的土台（それ以降も徐々に新しい方法が積み重ねられていった）によって、スターリンは、1938年までに1934年1月の「勝利の大会」=「統一の大会」で選出された中央委員とその候補139人のうち98人（70パーセント）を——フルシチョフがのちに秘密報告で述べたように——銃殺した。また同大会の代議員1966人のうち、1108人は反革命的犯罪の廉で逮捕された。1939年3月の第18回党大会に、再び代議員として出席した者はわずか59人に過ぎなかった。しかもこのうち24人は旧中央委員であり、5年前の平党員の代議員1827人のうち再び代議員になってきたのは、たった35人（2パーセント以下）であった。（同,〔下〕204）この5年間にスターリンは、粛清によって新たな党をつくり出したことになる。その最初が、キーロフ暗殺であった。

既に述べたように、「リューティン綱領事件」をめぐる1932年9月の政治局と中央委員会総会、「スミルノフ=エイスマント=トルマーチョフ陰謀事件」をめぐる1933年1月の政治局と中央委員会・中央統制委員会合同総会において、反党グループ全員の即時銃殺を要求するスターリンは敗北した。それは、「レーニン主義の原則」、つまり党内反対派に対する闘争において死刑という方法に訴えるなどというレーニンの政治的遺言を守るか否かをめぐるものであった。キーロフは、かつての「レーニン主義的」議論を用いて、死刑に依拠することは党にとって有害であると反対し、政治局と中央委総会の圧倒的多数の共感をかちとった。形式上は、この死刑をめぐる論争は単なる党内政策の問題であった。しかしスターリンの書記長の職からの更迭を要求する「反党グループ」の「陰謀」に対する政治局・中央委員会の論争の根底には、工業化と集団化をめぐる一般情勢の理解、スターリンの指導をめぐる理解の深刻な相違があった。1933年の1月総会がひらかれたのは、既に述べたように「組織的飢餓」の時期であった。飢餓は、それまで最も豊かな農業地帯——ウクライナ、北カフカース、ヴォルガ中流地方、西シベリア——でとくにひどかった。供出量は実際の収穫量より大きかった。穀物は、大量逮捕・大量処刑というこのうえなく野蛮な手段で取り上げられた。地方についての恐るべき報告が、次々とモスクワに到着した。農業の崩壊は、工業労働者を含む都市住民へのパンの供給の混乱をもたらした。生産性の全般的低下と社会不安の波は、政府機関の

崩壊のきざしさえうみだした。総会でスターリンに最も忠実な政治局員カガノヴィッチが演説している最中に飢餓の地域から帰ったばかりの一中央委員が、「しかし我々の地方では人々は人間を食べ始めているんだ」と叫んだが、これに対してカガノヴィッチは、「もし我々がしっかりしないならば、君も私も食べられるだろう…… その方がよいというのか」と切り返した、といわれている。(XLI,ニコラエフスキー, 84-85) 代議員たちは事態の恐しさに震えつつも、体制の運命は一本の糸にぶらさがっており、この糸が切れたら全員にとっての悲劇的な滅亡がもたらされるかもしれないことを恐れていた。つまり、代価はどれほど大きかろうとも、彼らは皆同じボートに身を託していたのである。総会の主要問題は、飢餓の結果の克服と春播種キャンペーンの組織化であった。多くの地方から、人口の減少した農村は播種を行う能力がないであろうという報告がきていた。キーロフは、中央委員会の批判者に加わらなかった。彼は、第一次5ヶ年計画と全面的集団化に指導的な役割を果たした党内ブロックの内部にとどまり、「退却の考え」を示唆する「弱い神経」の持主と闘いつつ「社会主義的攻勢」の継続を主張した。彼は、機械トラクター・ステーションに付属して政治部を組織するというスターリンの提案に賛成した。これは、コルホーズ農民に対する支配を更に強化することを意図したものであった。しかし同時に彼は、農民に対する大衆的抑圧の極端な形態を一時中止し、とくに北部への大量の強制移住を中止することを提案した。囚人を釈放する権限を与えられた特別の委員会が、地方の情勢を確かめるために最も重要な農業地域へ派遣された。その1つでヴォルガ中流地区へ派遣されたエヌ・クルイレンコ(ソ連邦人民検察官, 中央委員)の委員会は、サラトラ刑務所の調査を扱った報告部分で、そこでは数階の特別の大地下牢が掘られ、そのなかに数千人の逮捕された農民が死体と並んで横たわっている様子を伝えた。これらの委員会の報告の結果として、同年5月8日に、農家の追放数を年1万2000戸にまで引き下げる秘密の「訓令」が出された。スターリンとモロトフの署名のもとに、この「訓令」は「全ての党およびソヴェトの活動家、統合国家保安部や裁判所や検察庁の全ての機関」に配付された。(同86; XXXIX, コンクエスト〔上〕, 63)

キーロフは、これらの緩和措置を指導した。彼の影響力は、ほかならぬ彼こそ農民に対する残忍なテロとクラーク撲滅とを鼓舞し遂行した人々の一員であったことによっていた。この事実こそ、テロを緩和し、党内融和を推進し、党と人民の結びつきを回復する政策の主唱者として、影響力を増大することを可能にした要因であった。キーロフの考えの基礎は、経済的土台の変化に伴って遅かれ早かれイデオロギーの上部構造全体の再編成が不可避となるというマルクスの理論であった。集団化と工業化という土台の巨大な変化は、党として「上部構造」の変更の仕事に取り組むことを強いるであろうということであった。「一古参ボリシ

「エヴィキの手紙」によれば、キーロフの方針は次のようなものであった。

農村における小所有者的要素を撲滅するために必要であった破壊の時期は、いまや終了した。集団農場の経済状態は堅固になり、将来についての心配もなくなった。これは将来の発展にたいするしっかりした基礎を構成したのであって、経済状態が向上しつづけるにつれて、住民の広範な大衆がしだいしだいに政府に従うようになるであろう。そして、「内部の敵」の数は減少するであろう。いまや、経済発展の新しい局面で党を支持するであろう勢力を呼び集め、そしてソヴェト権力がよって立つ基礎を広げることが党の任務である。
(XLI, ニコラエフスキー, 48)

キーロフの見解は、政治局内において相当な影響力をもった。政治局員は全てスターリンが厳選した人たちで、スターリンの「総路線」そのものを擁護することを堅く誓ってはいたが、その手段と方法について意見の対立が起こった。政治局内に新しい分裂が生じたが、その際問題は、スターリンに対する反対ではなく、スターリンに対する影響力をめぐる闘争であった。キーロフ、ヴォロシーロフ、ルズタク、カリーニンは、スターリンに彼の強権制^{ディクタトル}により自由主義的な色合いを加えることを要求した。ヴォロシーロフは、軍隊内の士気に対する集団化の影響を考慮しなければならなかった。ヴォロシーロフは、政治局で極東軍司令官ブリュッヘルを支持して、極東の農民に対する集団化の免除を獲得した。ジノヴィエフ反対派弾圧のために赴いたレニングラードで、キーロフは、政治警察の暴走を食い止めるために努力した。(同, 58; XXXIII, ドイツチャー, 46) スターリン指導部は2つの選択に直面していた。即ち、テロを強化して反対派を打ち砕くか、それとも「人民との和解」を試み、来るべき戦争に備えて人民の自発的協力をかちとるべく努めるか、であった。第二の選択肢を最も確信をもって主唱したのがキーロフとゴーリキーであった。ゴーリキーは、非党員インテリゲンチヤを党=国家と和解させる必要を熱心に主張し、党内融和政策というキーロフの考えを擁護した。ゴーリキーはスターリンに大きな影響力をもっていた。カーメネフを高く評価していた彼は、スターリンとカーメネフの和解のための会談を準備したといわれている。(XLI, ニコラエフスキー, 60) カーメネフはアカデミー出版局の管理権を与えられ、近い将来に重要な政治的地位を約束された。ブハーリンも『イズヴェスチヤ』編集員として復職した。キーロフその他の「もはやなんらかの重要性をもつ敵で和解しえない敵はいない」という融和政策の結果であった。

キーロフの成功は、1934年1月の第17回党大会並びに同年11月の中央委員会総会で絶頂に

達した。彼は政治局員に再選されただけでなく、中央委員会書記にも選出された。党書記局のイデオロギー部門は、彼の監督に服することになった。党大会での彼の演説は熱狂的な歓迎をうけた。その舞台裏では、大会直前かそれとも大会当初かに、かなり多数の州委員会と各民族共産党中央委員会の書記などの有力党員グループがキーロフと会談し、スターリンを更迭する必要を説いたといわれる。会談にはオラヘラシヴィリ、ペトロフスキー、オルジョニキツェ、ミコヤンなど政治局員・同候補・中央委員が参加した。だがキーロフは、スターリン更迭にもキーロフを書記長に選出する提議にも同意しなかった。スターリンの強権的指導に対する不満は、大会における中央委員会選出の票決にもあらわれた。スタータンに投ぜられた票は、中央委員リスト中で最も少なかった。キーロフ反対票は合計3票であったのに対し、スターリン反対票は約270票であった。中央委員会の候補者数が定員と同数であったためにスターリンは当選したとあってよい。この大会で投票管理委員会の副委員長であったヴェルホヴィフの証言によると、この委員会は当惑し、大会に投票結果を公表する決心がつかなかった。管理委員長ザトンスキーは、管理委員会にカガノヴィチを呼び相談した。カガノヴィチは、スターリンの氏名を抹消した票の大部分を破棄した。大会議場ではスターリンへの反対票は、キーロフと同数の3票であったと報告された。(XXXVII, メドヴェーデフ〔上〕, 251-2)

キーロフは、トロッキー以来の最大の雄弁家であった。彼の「自由主義」は党内で大きな支持をえた。「すばらしいレーニン主義者キーロフ」の気持はますます高まった。それに重要なことであるが、彼はレニングラード党組織を支配していた。スターリンの生涯においてレニングラードは、1926年のジノヴィエフの解任から1950年のレニングラード共産党の第三世代の虐殺に至るまで、謀反の温床とみなされていた。キーロフは、この「ヨーロッパの窓」を西側の文明と芸術を吸収する前進基地にしようとした。彼は、かつてのジノヴィエフの伝統を復活させ、レニングラードをモスクワに匹敵する文学と科学の中心地にするために苦心した。出版活動を援助し、定期刊行物の出版に財政上並びに検閲上の便宜を講じ、科学団体の活動を援助した。かつてツァーリ時代の自由主義的知事たちが政治亡命者たちをシベリアでの科学研究や調査に協力するよう招いたのと同様に、かつての反対派を出版その他の職務につかせるよう奨励した。1934年の秋には、「メンシェヴィキ全国ビューロー事件」に連座した罪人リャザノフにレニングラード居住を許したほどであった。(XLI, ニコラエフスキー, 58) キーロフはまた、党路線より右寄りの古参ボルシェヴィキとも協力していた。このようなキーロフのレニングラードでの活動と政治局・中央委員会での影響力と人気の増大が、スターリンをいらだたせなかったと想像することはできない。しかしスターリンは総路線の完全な

支持者で、最も精力的にそれを実施したキーロフに対して逸脱その他の理由で攻撃することはできなかった。より「自由主義」的な指導部（キーロフ派）に取って代わられるかもしれないという危険と恐れに直面したスターリンは、自分の政治的覇権を確保するためには、何らかの手をうたなければならなかった。何らかの手を打たなければならなかったと感じていたのはスターリンだけではなかった。党内政策の変更によって、中央委員会が党と人民との架橋を試み党内融和を推進する人々によって占められることに必死に抵抗した人々がいた。とくに政治局からさえ自立化していた政治・治安警察などの弾圧機関で働く人々であった。最終的回答は——中央委員会書記・政治局員・レニングラード市党委員会第一書記の暗殺であった。

参考文献および引用文献

- I G・バランディエ(渡辺公三訳)『舞台の上の権力——政治のドラマトゥルギー——』(平凡社, 1982年)
- II S・ライマン, M・スコット(清水博之訳)『ドラマとしての社会』(新曜社, 1981年)
- III N・エブレイノフ(清水博之訳)『生の劇場——演劇的本能の戯れ——』(新曜社, 1983年)
- IV J・デュビニョー(渡辺淳訳)『スペクタクルと社会——劇的想像力の社会的機能について——』(法政大学出版局, 1973年)
- V 青木保『儀礼の象徴性』(岩波書店, 1984年)
- VI 山口昌男『歴史・祝祭・神話』(中央公論社, 1978年)
- VII 山口昌男『文化の詩学II』(岩波書店, 1983年)
- VIII 『現代思想』特集「演劇としての政治」, 1984年4月号
- IX マルセル・モース, アンリ・ユベール(小関藤一郎訳)『供儀』(法政大学出版局, 1983年)
- X ミルチャ・エリアーデ(風間敏夫訳)『聖と俗』(法政大学出版局, 1969年)
- XI ルネ・ジラル(古田幸男訳)『暴力と聖なるもの』(法政大学出版局, 1982年)
- XII A・ミッチャーリヒ(竹内豊治訳)『攻撃する人間』(法政大学出版局, 1979年)
- XIII エリック・ホフファー(高根正昭訳)『大衆運動』(紀伊国屋書店, 1969年)
- XIV エドガール・モラン(田中正人訳)『ソ連の本質——全体主義的複合体と新たな帝国——』(法政大学出版局, 1986年)
- XV 森島恒雄『魔女狩り』(岩波書店, 1970年)
- XVI J・ミシュレ(篠田浩一郎訳)『魔女(上)(下)』(岩波書店, 1983年)

- XVII 溪内謙『現代社会主義の省察』（岩波書店、1978年）
- XVIII 溪内謙『スターリン政治体制の成立・第一部』（岩波書店、1971年）
- XIX R・バーロ（永井清彦、村山高康訳）『社会主義の新たな展望1・II』（岩波書店、1980年）
- XX H・C・ダンコース（尾崎浩訳）『奪われた権力（上・下）——ソ連における統治者と被統治者——』（新評論、1982年）
- XXI F・フェヘル、A・ヘラー、G・マルクシュ（富田武訳）『欲求に対する独裁——「現代社会主義」の原理的批判——』（岩波書店、1984年）
- XXII J・コスタ（野尻武敏監訳）『現代の社会主義——理論と現実——』（新評論、1978年）
- XXIII W・ブルス（佐藤経明訳）『社会主義における政治と経済』（岩波書店、1978年）
- XXIV F・フェイト（熊田享訳）『スターリン時代の東欧』（岩波書店、1979年）
- XXV W・ホーフマン（石川晃弘、石川康子訳）『スターリン主義と反共主義』（紀伊国屋書店、1970年）
- XXVI 片桐薫『ヨーロッパ社会主義の可能性』（岩波書店、1983年）
- XXVII W・ブルス（鶴岡重成訳）『東欧経済史 1945-80』（岩波書店、1984年）
- XXVIII A・グリュクスマン（田村俣訳）『現代ヨーロッパの崩壊』（新潮社、1981年）
- XXIX ストラノヴィッチ（野村 訳）『社会主義の批判と未来』（御茶の水書房、1980年）
- XXX 大室幹雄「ベリヤの引出し」、大江健三郎・中村雄二郎・山口昌男編『叢書文化の現在』第12巻『仕掛けとしての政治』（岩波書店、1981年）所収
- XXXI A・ノーブ（和田春樹、中井和夫訳）『スターリンからブレジネフまで——ソヴェト現代史——』（刀水書房、1983年）
- XXXII パウル・レンドヴァイ（片岡啓治訳）『操られる情報——ソ連・東欧のマス・メディア——』（朝日新聞社、1984年）
- XXXIII I・ドイッチャー（上原和夫訳）『スターリン——政治的伝記——』（みすず書房、1984年）
- XXXIV G・ボッフア（坂井信義訳）『スターリン主義とは何か』（大月書店、1983年）
- XXXV G・ボッフア、G・マルチネ（佐藤紘毅訳）『スターリン主義を語る』（岩波書店、1978年）
- XXXVI ロイ・メドヴェーデフ（佐藤紘毅訳）『ソ連における少数意見』（岩波書店、1978年）
- XXXVII ロイ・メドヴェーデフ（石堂清倫訳）『共産主義とは何か（上・下）——スターリン主義の起源と終結——』（三一書房、1974年）

- XXXVIII ロイ・メドヴェーデフ(石堂清倫訳)『社会主義的民主主義』(三一書房, 1974年)
- XXXIX R・コンクエスト(片山さとし訳)『スターリン恐怖政治(上・下)』(三一書房, 1976年)
- XL I・ドイッチャー(大島かおり, 菊地昌典訳)『大粛清・スターリン神話』(TBSブリタニカ, 1985年)
- XLI ボリス・ニコラエフスキー(中村平八, 南塚信吾訳)『権力とソヴェト・エリート』(みすず書房, 1970年)
- XLII スティーヴン・F・コーエン(塩川伸明訳)『ブハーリンとボリシェヴィキ革命—政治的伝記1888~1938—』(未来社, 1979年)
- XLIII ハナ・アーレント(大久保和郎, 大島かおり訳)『全体主義の起源(3) 全体主義』(みすず書房, 1986年)
- XLIV ロイ・メドベデーフ, ジョレス・メドベデーフ(下斗米伸夫訳)『フルシチョフ権力の時代』(御茶の水書房, 1980年)
- XLV アルド・アゴ스티ー(坂井信義訳)『評伝スターリン』(大月書店, 1985年)
- XLVI 『スターリン全集』第6巻(大月書店, 1952年)
- XLVII 『スターリン全集』第12巻(大月書店, 1953年)
- XLVIII 『レーニン全集』第33巻(大月書店, 1955年)
- XLIX シクロフスキー「規範の否定者としてのレーニン」, 桑野隆訳『レーニンと言語』(三一書房, 1975年) 所収
- L 本山美彦「マルクス主義と抑圧」, 有斐閣『書齋の窓』(1983年5・6月号) 所収
- LI 『マルクス・エンゲルス全集』第18巻, (大月書店, 1967年)
- LII ラドスラフ・セルツキー(宮鍋熾, 西村可明, 久保庭真彰訳)『社会主義の民主的再生—新しい政治経済システムの展望—』(青木書店, 1983年)
- LIII 浜内謙, 荒田洋編『スターリン時代の国家と社会』(木鐸社, 1984年)
- LIV ナジェージダ・マンデリシュターム(木村浩, 川崎隆司訳)『流刑の詩人・マンデリシュターム』(新潮社, 1980年)
- LV E・S・ギンズブルグ(中田甫訳)『明るい夜暗い昼』(平凡社, 1974年)
- LVI 石堂清倫, 江川卓, 菊地昌典編『ソヴェト反体制 第一輯 地下秘密出版のコピー』(三一書房, 1976年)
- LVII ソルジェニーツィン(木村浩訳)『収容所群島』(新潮社, 1975年)
- LVIII ソルジェニーツィン(木村浩訳)『イワン・デニーソヴィチの一日』(新潮社, 1963年)

- LIX ジョレス・メドヴェーデフ、ロイ・メドヴェーデフ（石堂清倫訳）『告発する！狂人は誰れか——顛狂院の内と外から——』（三一書房、1977年）
- LX S・ブロック、P・レダウェイ（秋元波留男、加藤一夫、正垣親一訳）『政治と精神医学——ソヴェトの場合——』（みすず書房、1983年）
- LXI 藤村信『プラハの春、モスクワの冬』（岩波書房、1975年）
- LXII 藤村信『春はわれらのもの——軍靴下のポーランド——』（岩波書房、1979年）
- LXIII 藤村信『ポーランド——希望の実験』（岩波書房、1981年）
- LXIV 藤村信『西欧左翼のルネッサンス』（岩波書房、1977年）
- LXV 田口富久治『先進国革命と多元的社会主義』（大月書店、1978年）
- LXVI 田口富久治「現存する社会主義と官僚制」, 同他編『現代民主主義の諸問題』（御茶の水書房、1982年）所収
- LXVII 藤田勇『社会主義社会論』（東大出版会、1980年）
- LXVIII 内田健二「ノメンクラトゥーラの一側面」, 『思想』（岩波書房、1977年2月号）所収
- LXIX 浜内謙「ソ連の官僚制」, 『思想』（岩波書房、1965年1月号）所収
- LXX 塩川伸明「スターリンのプロレタリアート独裁論——<党独裁>論争と<伝導ベルト>論をめぐって——」, 『思想』（岩波書房、1977年12月号）所収
- LXXI M・ウェーバー（林道義訳）『ロシア革命論』（福村出版、1969年）
- LXXII M・ウェーバー（濱野朗訳）『社会主義』（講談社、1980年）
- LXXIII M・ウェーバー（脇圭平訳）『職業としての政治』（岩波書房、1980年）
- LXXIV 林道義『ウェーバー社会学の方法と構想』（岩波書房、1970年）
- LXXV 濱野朗『ウェーバーと社会主義』（有斐閣、1975年）
- LXXVI W・モムゼン「資本主義と社会主義——マルクスとの対決——」, 同（中村貞二、米沢和彦、嘉目克彦訳）『マックス・ヴェーバー 社会・政治・歴史』（未来社、1977年）所収
- LXXVII R.H.Hunt, *The Political Ideas of Marx and Engels, Vol.II, Classical Marxism 1850-1895*, University of Pittsburgh Press, 1984.
- LXXVIII Lynn Hunt, *Politics, Culture, and Class in the French Revolution*, University of California Press, 1984.
- LXXIX Robert C. Tucker, *The Soviet Political Mind : Stalinism and Post - Stalin Change*, W. W. Norton & Company, New York, 1971.
- LXXX Bohdan Harasymiw, *Nomenklatura : The Soviet Communist Party's Leadership Recruitment System*, in : *Canadian Journal of Political Science*, Vol. II, No. 4, December 1969.

- LXXXI Bohdan Harasymiw, *Political Elite Recruitment in the Soviet Union*, Macmillan Press, 1984.
- LXXXII John Barber, Stalin's Letter to the Editors of Proletarskaya Revolyutsiya, in : *Soviet Studies*, Vol. XXVIII, No. I, January, 1976.
- LXXXIII T.H.Rigy, Early Provincial Cliques and the Rise of Stalin, in : *Soviet Studies*, Vol. XXXIII, No. I, January 1981.
- LXXXIV R.W.Davies, The Syrtsov-Lominadze Affair, in, *Soviet Studies*, Vol. XXXIII, No. I, January 1981.
- LXXXV Steven Rosefielde, An Assessment of the Sources and Uses of Gulag Forced Labour 1929-56, in : *Soviet Studies*, Vol. XXXIII, No. I, January 1981.
- LXXXVI S.D.Wheatcroft, On Assessing the Size of Forced Concentration Camp Labour in the Soviet Union, 1929-56, in : *Soviet Studies*, Vol. XXXIII, No. 2, April 1981.
- LXXXVII Yuzuru Taniuchi, A Note on the Ural - Siberian Method, in : *Soviet Studies*, Vol. XXXIII, No. 4, October 1981.
- LXXXVIII Robert H. McNeal, The Decisions of the CPSU and the Great Purge, in : *Soviet Studies*, Vol. XXIII, No. 2, October 1971.
- LXXXIX John Biggart, Kirov before the Revolution, in : *Soviet Studies*, Vol. XXIII, No. 3, January 1972.
- XC Robert G. Wesson, The Soviet State, Ideology and Patterns of Autocracy, in : *Soviet Studies*, Vol. XX, No. 2, October 1968.
- XCI Olga A. Narkiewicz, Soviet Administration and the Grain Crisis of 1927-28, in : *Soviet Studies*, Vol. XX, No. 2, October 1968.
- XCII Michael Waller, The-ism of Stalinism, in : *Soviet Studies*, Vol. XX, No. 2, October 1968.
- XCIII A.L.Unger, Stalin's Renewal of the Leading Stratum : A Note on the Great Purge, in : *Soviet Studies*, Vol. XX, No. 3, January 1969.
- XCIV Alec Nove, Was Stalin Really Necessary ?, in : *Encounter*, Vol. XVIII, No. 4, April 1962.
- XCV Robert Conquest, The Great Purge, in : *Encounter*, Vol. XXXI, No. 4, October 1968.
- XCVI Leonard Schapiro, The Triumph of Lenin & Stalin, in : *Encounter*, Vol. LXII, No. 3, March 1984.
- XCVII Steven Rosefielder, Excess Mortality in the Soviet Union : A Reconsider-

ation of the Demographic Consequences of Forced Industrialisation 1929-1949, in : *Soviet Studies*, Vol. XXXV, No. 3, July 1983.

XCVIII Robert Conquest, Forced Labour Statistics : Some Comments, in : *Soviet Studies*, Vol. XXXIV, No. 3, July 1982.

IC Jan T. Gross, A Note of the Nature of Soviet Totalitarianism, in : *Soviet Studies*, Vol. XXXIV, No. 3, July 1982.

C S.G.Wheatcroft, Towards A Thorough Analysis of Soviet Forced Labour Statistics, *Soviet Studies*, Vol. XXXV, No. 2, April 1983.

CI Chalmers Johnson (ed.), *Change in Communist Systems*, Stanford University Press, 1970.

CII Isaac Deutscher and David King, *The Great Purges*, Basil Blackwell Publisher, 1984.

<編集後記>

社研月報 No.292 を、お届けいたします。今年もはや年末の声をきく時節となり、所員諸氏におかれましては、何かと気ぜわしく、御多忙の毎日と存じます。寒さも一段と厳しさに向かう折から、御自愛下さい。

月報(63年2月号、3月号掲載予定)の原稿を募集いたしております。お手持の論文、研究ノート等ございましたらば、ふるって御応募下さいますよう御願ひ申し上げます。また、来年4月以降の掲載予定の原稿につきましても、現在のところ予定はまだたっておりません。所員の皆様に、今から心がけていただければ幸いです。(B. K.)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話(044)911-8480(内線33)

専修大学社会科学研究所

(発行者) 三輪芳郎

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話(03)404-2561
